

Robert Frost と Wallace Stevens

— 比較考察 —

中 条 愛 子

Robert Frost と Wallace Stevens について、彼等が共にアメリカ20世紀を代表する大詩人であるとする評価は完全に定まったと見ることが出来る。一般読者には大きな衝撃を与えはしたものの、批評家の間では、現代詩のあるべき姿としてその詩が早くから受け入れられた T. S. Eliot と比較して、これら2人の詩人が批評家によって正しく理解され、受容されるには、かなりの時間が必要であった。フロストの場合、民衆の詩人として、又いわゆる売れる詩人となることを目指し、自分の詩の皮相的な読み方を自ら奨励したこともあり、又詩作以外の活動に力を注ぐ等、詩壇に強力な詩人として認められる迄にはかなりの紆余曲折があった。あまりにも地方色に限定され、哲学がなく、モダニティーに欠けているというのが一般のフロストの詩に対する印象であった。一方スティーヴンズは有力な保険会社副会長としての地位を頑固に守り通し、このため彼の詩人としての活動にはかなりの制限があった。雑誌社の要請に答えて少数ずつ発表される詩は、総合的に読まれることは少く、スティーヴンズ自身もそれを望んでいたのであるが、詩人からは切り離された存在として読まれ、絢爛たる印象派的な詩として認められても、モラルに欠け唯美的で現実に背を向けた詩であると見なされていた。¹ またフロストが最もアメリカ的詩人であるとし

¹ 本稿中のスティーヴンズについての伝記的事実は他の注がない限りすべて Joan Richardson, *Wallace Stevens; A Biography: The Early Years, 1879-1923* (New York: Beech Tree Books, William Morrow, 1986) 同じく *Later Years, 1923-1955* (1988) によっている。

て一般大衆に広く受け入れられたのに対し、スティーヴンズは最も反アメリカ的詩人、ヨーロッパの芸術にどっぷり浸った審美主義の詩人であると考えられ一部の知識層に受け入れられた。

現在、彼等の業績に総合的に接近できるようになり、伝記や手紙等の出版によって、彼等について多くの事実が明らかにされている。その成果の一つは、アメリカ詩の両極を代表すると見なされていた二人の詩人に意外な共通点が見られるようになったことではなからうか。すなわち、フロストとスティーヴンズは、その *diction*、*style*、*tone* における相違点が大であるにもかかわらず、同じ時代を生き、不安の時代、絶望、荒廃の時代、20世紀前半の詩人として、現実を直視し、如何に生きるべきかを問い、ニヒリズムと戦い、現代の荒廃からの救いを詩に求めた所に共通点が見られると私は思うのである。

本稿においては、現代を「荒地」として認識する詩人としてのフロストとスティーヴンズにおける共通点を論じ、さらに荒廃した現代における詩人の役割についての両詩人の考え方の共通点と相違点に目を向けて論じてみたいと思う。

フロストとスティーヴンズは共に人間が物理的におかれている外的状況、すなわち自然、風景、天候と人間の心的状況を重ねて詩の中に歌いこむ詩人である。現代の荒廃の状況は両詩人において、冬の情景として描かれることが多い。先ずフロストの“Desert Places”² を考察して見よう。この詩は1934年4月 *The American Mercury* に発表され、1939年 *A Further Range* に収録された。フロストの詩でしばしば描かれる雪景色の中でこの詩は恐らく最も荒涼としたものであろう。以下に全詩を引用する。

² Edward Connery Lathem, ed., *The Poetry of Robert Frost* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1969), p. 296. 以下フロストの詩の引用は本書により各引用の後尾に頁番号のみを記すこととする。

Snow falling and night falling fast, oh, fast
In a field I looked into going past,
And the ground almost covered smooth in snow,
But a few weeds and stubble showing last.

The woods around it have it—it is theirs.
All animals are smothered in their lairs.
I am too absent-spirited to count;
The loneliness includes me unawares.

And lonely as it is, that loneliness
Will be more lonely ere it will be less—
A blanker whiteness of benighted snow
With no expression, nothing to express.

They cannot scare me with their empty spaces
Between stars—on stars where no human race is.
I have it in me so much nearer home
To scare myself with my own desert places.

この詩のスピーカーとフロストは完全に同一視することができる。そしてフロストの他の多くの詩におけるスピーカーと同じく、家をあとにして歩いている。³ 通りすぎながら見た野原には雪が降り夜が迫っている。地面

³ レントリクシアはこの詩のスピーカーを他の多くの詩のスピーカーと identify し、彼を “a solitary night walker” と呼んでいる。Frank Lentricchia, *Robert Frost: Modern Poetics and the Landscape of Self* (Durham, N. C.: Duke University Press, 1975), p. 97.

はすっかり雪におおわれ雑草と切株が最後の姿を見せているのみである。

“Snow falling and night falling fast, oh, fast”という出だしの行について、レントリクシアは、その挽歌の響きを持つ母音の使用に言及して、スピーカーの宇宙的無限の恐怖感がこの音調から感じとられると論じている。⁴ それと同時に、長母音の繰り返しの使用は pentameter の行をゆるやかにしているにもかかわらず、二度の“fast”の使用の間に“oh”を入れこむことによって、スピーカーの切迫感を伝えるのに成功しているように思われる。

第二節の“it”は、かなりの曖昧性を持っている。レントリクシアは引き続き、この“it”が文法的には“snow”と“loneliness”を指すとしながらも、詩全体の勢いからして、これが究極的には中性の“it”すなわち無、ひいては“desert places”そのものを指すことになることを指摘している。⁵ 動物たちはねぐらに閉じこめられ安全である。“smother”という語の使用は、雪があらゆるものを埋めつくす力を感じさせるが雪を意識の中に取り込まない動物の状態はスピーカーにとってはむしろ羨ましいものであろう。

“After Apple-Picking”の“Woodchuck”が連想される。動物でないスピーカーは強い不在感を感じるあまり、その情景の一部として存在することもできない(I am too absent-spirited to count;)。孤独が気づかぬうちに、不意にスピーカーを包みこむ。8行目の“The loneliness includes me unawares.”は孤独を擬人化することによって、孤独感が内からのものであるより、外からのものであることを強調しているように思われる。

“unawares”は“include”という“loneliness”を主語とする動詞を修飾するのであるから、スピーカーにとっての不意の孤独感は“loneliness”にとっては“include”という行為が意識的な行為でないことを示唆していると考え

⁴ *Loc. cit.*

⁵ *Loc. cit.*

えることができる。それ故雪景色が示す寂寥感は人間性をこえた宇宙的な広がりを持ち、同時に宇宙的な冷酷さをも示し始めるのである。

第三節においてはその“loneliness”がますます深まるであろうことが歌われている。夜になって降り積るであろう雪の修飾語として、“benighted”が用いられているが、Marcus はこの語の double meaning を指摘している。すなわち「夜に入った」と「精神的無知」の二重の意味である。⁶ ここにおいて雪または雪景色は人間と相対する inhuman の要素を強め、表情もなく、表現するものもなく、全くの「無」と化するのである。続く最終節で詩の調子はがらりと変化する。誰を指すとも知れない三人称複数の“they”が突然導入される。彼らはスピーカーをおびやかす雪の野原よりも恐しい広大な星と星の間の空間、または人の住まぬ星の“empty spaces”(無の空間)をもってスピーカーをおびやかすかも知れぬ。Marcus はこの“they”を科学者もしくは聖職者であるとし、星の間の無限の空間を見て感じる恐怖についてのパスカルの言葉のエコーを指摘している。⁷ しかしスピーカーはすでに自己の精神生活の中でその“loneliness”に直面し、それに打ち勝って来たのである。この詩においては詩人の内面の“loneliness”が風景の“loneliness”と美事に同一化され、現代世界の道徳的、精神的荒廃が鋭く示唆されている。詩人は荒涼たる雪景色の中に現代の無を直視しながら、自己の中に存在する暗黒を見すえ、いまさら“they”におどされることなく暗黒の中に光を見出し、自力で自己の救いを達成する強い意志を示している。

始めに述べたように、現代を「荒地」と見る点においてスティーヴンズはフロストと共通する点を持っている。フロストより5才年下のスティー

⁶ Mordecai Marcus, *The Poems of Robert Frost: An Explication* (Boston, Mass.: G. K. Hall & Co., 1991), p.148.

⁷ *Loc. cit.*

ヴンズは、21才で今世紀の変わり目を迎えた。そして1955年に没する迄の55年間、激動の20世紀前半世紀を生きたのである。父方はオランダ改革派に、母方はルーテル教会に所属する厳格なピューリタンの家庭教育を受けたスティーヴンズは、自由神学の温床ハーバード大学で詩人としての基礎となる語学、文学、哲学を学び、一時ジャーナリズムを目指したが、父の強い意志に屈して法律家の道を選び、保険会社に勤め安定した収入を得る手だてを先ず確保した。この間詩作は天才の必然のように継続されたが、詩人としての自分を誇示することはあまり好まなかったという。

さてフロストとスティーヴンズは互いにその存在を意識してはいたが、その交りは詩人としての表面的な交り以上に深まることはなかった。フロストが最初にスティーヴンズに言及しているのは早くも1915年のことである。Louis Untermeyer 宛の手紙の中でスティーヴンズの“Peter Quince at the Clavier”に関する言及がありフロストらしいひねりとユーモアを交えた寸評を見ることができる。フロストは明らかにこの詩が好きになれなかったが、以下の引用の直前に Amy Lowell を酷評している所と比較すると、フロストがスティーヴンズの並はずれた才能を感知していたと解釈することが可能であると思われる。

... Susanner simply bothers me. A priori I ought to like any latter-day poem that uses the word “bawdy.” I don’t know why I don’t like this one unless it is because it purports to make me think. A bawdy poem should go as easy as a song: “In Amsterdam there lived a maid,” frinstance.⁸

⁸ *The Letters of Robert Frost to Louis Untermeyer* (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1963), p.17.

上記引用の中に先ず読みとれるのはフロストとスティーヴンズが用いる語彙の相違である。フロストは平易な語を用いる口語体に徹すること、その中に新鮮な驚きを盛ることを一貫して行った。スティーヴンズは、丁度その逆で、きらびやかな語、外国語、あたかも外国語のように響く土着の個有名詞を用い、初期のエリオットを思わせる斬新なイメージの結合が特色となっている。この手紙から読みとれるもう一つの点は、スティーヴンズの哲学性である。フロストは、楽しませる軽い詩であるようによそおった“Peter Quince at the Clavier”が、実は思索をかきたてる点に着目しているのである。これは見事な直感で、スティーヴンズにとって詩とは「精神の行動の詩」⁹なのである。思索することそのもの、その思索の過程が詩なのである。最後に音楽にフロストの注意が向いていることに目を向けたい。スティーヴンズが音楽に造詣が深かったことはよく知られている。“Peter Quince”が音楽の motif による美の追求であり、形式も意識的にソナタ形式が用いられていることから考えて、フロストの寸評がスティーヴンズの特徴を見事に言い当て、詩人の鋭い直感を示したものであるということができよう。

1915年といえば、*North of Boston* がアメリカにおいてベストセラーの一つとなり、また1916年の *Mountain Interval* の出版を間近にひかえた時である。英国での生活を経験したフロストは、ニュー・イングランドに戻り、ニュー・イングランドの詩人として、アメリカ現代詩人の地位の確保にのり出していた。Ezra Pound を通して知った『ポオエトリ』誌を中心とする新詩運動にも、またイマジズムの運動にも組せず、ひたすら自己の詩境を切り開く決意をしていた時である。スティーヴンズの詩が一つの脅

⁹ Wallace Stevens, *The Collected Poems of Wallace Stevens* (New York: Knopf, 1954; 1982) p. 240. 以下スティーヴンズの詩の引用は本書により各引用の後尾に頁番号のみを記すこととする。

威を与えたことは想像するに難くない。一方スティーヴンズのフロストに対する反応はおだやかなものである。定収入のある職業を持っていることは彼にある種の余裕を与えているのであろうか。フロストと違ってフロストの詩に対する洞察を示す言及はない。しかし彼の晩年の Barbara Church に宛てた手紙の中で、アマストにおけるフロスト80才の誕生祝賀会への招待を断ったことにふれた後次のような言及がある。

... Frost is greatly admired by many people. I do not know his work well enough to be either impressed or unimpressed. When I visited the rare book library at Harvard some years ago the first thing I saw was his bust. His work is full (or said to be full) of humanity.¹⁰

アメリカの“monument”あるいは“institution”と化してしまったフロストに対するいささかの皮肉が感ぜられなくもない文章であるが、スティーヴンズが特に一つだけ言及している所が、自分に欠けていると自分も思い他人もそう思っていると考えている点であることは興味深い。「彼の作品は人間味にあふれている（或いはあふれているそうだ）」という文は作品と詩人を切り離して考えられると思ひ、むしろ読者に対してその傾向を助長していたスティーヴンズが、徐々に年を重ねるにつれ、詩人の人格と創作の間に関連のない詩は存在しないこと、また読者と作者の間のコミュニケーションが芸術に不可欠の要素であることを感じ始めていたことを考えると、彼の感慨が思わず吐露されていることを感じざるを得ないのである。

確かにスティーヴンズの詩の中に詩人のパーソナルな存在を感じとるこ

¹⁰ Holly Stevens ed., *Letters of Wallace Stevens* (New York: Knopf, 1966; 1972). To Barbara Church, March 15, 1954, p. 825.

とは、フロストの場合と違って困難である。例えば次に引用する “The Snow Man” は、フロストの “Desert Places” とよく比較される詩である。

One must have a mind of winter
To regard the frost and the boughs
Of the pine-trees crusted with snow;

And have been cold a long time
To behold the junipers shagged with ice,
The spruces rough in the distant glitter

Of the January sun; and not to think
Of any misery in the sound of the wind,
In the sound of a few leaves,

Which is the sound of the land
Full of the same wind
That is blowing in the same bare place

For the listener, who listens in the snow,
And, nothing himself, beholds

Nothing that is not there and the nothing that is. (9-10)

“The Snow Man” は1921年に発表され1923年出版の *Harmonium* に入れられた。1月の太陽が遠くのエゾマツに光っている以外には全く “Desert Places” の冬景色である。“distant glitter” という表現からして、やがて

“Desert Places”の中の“benighted”の状態が迫っていることが暗示されている。この冬の荒涼の相を最も正しく視ることがこの詩の中心である。Joseph Carroll は、“The Snow Man”の主題を“purification of perception”であるとしている。¹¹ またスティーヴンズ自身は、Hi Simons の質問に答えて、“I Shall explain The Snow Man as an example of the necessity of identifying oneself with reality in order to understand it and enjoy it.”¹² と述べている。対象を正しく認識（知覚）するためには、対象物と同一化しなければならない。現実を理解し、それを味わうためには現実と一体化する必要があるとスティーヴンズは言う。しかしこの説明は的を得たものであるとはいえ、有機体としての詩の有するすべての要素を十分に説明しているとはいえない。詩が哲学論理でない限り読者がそこに読みとるのは、先ず“desert places”ではなかろうか。そして、それを見る主体があればこそ、その“desert”ぶりが読者の心を打つように詩に表現されるのである。読者は先ず、冒頭の“one”と自己を identify するであろう。そして全体が一文でなっているこの詩のシンタックスに導かれて、“And, nothing himself, beholds/Nothing that is not there and the nothing that is.”まで読みすすみ、心底から冷えこんでしまうのである。この底知れぬ荒涼感がかもし出されるのは7行目の“not to think/Of any misery...”という否定形によって、reality の知覚の純化のために、客体に対する一切の human projection が拒絶されている所に最も大きな原因があるように思われる。自分自身無となり、そこには何も見えず、そこにある無のみを見るという最後の二行の中に4つの否定形が凝縮されているが、この negation が生きるのは、7行目の“not to think”の

¹¹ Joseph Carroll, *Wallace Stevens' Supreme Fiction: A New Romanticism* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1987), p. 35.

¹² *Letters of Wallace Stevens, op. cit.* To Hi Simons, April 18, 1944, p. 464.

negation によるものであると私は思うのである。これはフロストの “The Need of Being Versed in Country Things” の最終行 “not to believe the phoebes wept.” (242) と基本的には同じ思想を表わしているのであるが、人間に対する客体である自然の無関心を徹底的に示している点では “The Snow Man” の negation はより強烈であると思う。

さて最終節の “the listener” は論理的に最初の “one” である。“one” が “a mind of winter” を持った時、最終行の “the listener” になるということであろう。彼が見る “Nothing that is not there” は彼の主体、そして “the nothing that is” は客体すなわち reality すなわち冬景色の全くの “bare place”, “Desert Places” の中の “blanker whiteness” である。この詩を reality と imagination あるいは perception の問題を扱った詩として簡単に読み過すことはできないようである。客体を選ぶのは主体である詩人だからである。スティーヴンズの中に第一次大戦後の荒廃した世界のヴィジョンがなく、単に perception の問題としてこの冬景色が描かれたとは考えにくい。フロストの詩のように詩人がどのように感じているかがじかに読者に伝わってくることはないが、この不安の時代といわれている20世紀の現実を “the waste land” と見る認識においてスティーヴンズはフロストと共有する点を持っているということができよう。

次に考察したいと思うスティーヴンズの “No Possum, No Sop, No Taters” においてこの類似点はさらに接近して来るように思われる。以下にその全詩を引用してみよう。

He is not here, the old sun,
As absent as if we were asleep.

The field is frozen. The leaves are dry.

Bad is final in this light.

In this bleak air the broken stalks
Have arms without hands. They have trunks

Without legs or, for that, without heads.
They have heads in which a captive cry

Is merely the moving of a tongue.
Snow sparkles like eyesight falling to earth,

Like seeing fallen brightly away.
The leaves hop, scraping on the ground.

It is deep January. The sky is hard.
The stalks are firmly rooted in ice.

It is in this solitude, a syllable,
Out of these gawky flutterings,

Intones its single emptiness,
The savagest hollow of winter-sound.

It is here, in this bad, that we reach
The last purity of the knowledge of good.

The crow looks rusty as he rises up.
Bright is the malice in his eye . . .

One joins him there for company,
But at a distance, in another tree.(293-94)

最初の二節がかもしだす雰囲気はフロストの“The Strong Are Saying Nothing”を反響させているように思われる。他のスティーヴンズの詩と切り離してフロストの詩の中にまぎれ込んでもおかしくない程似ていると感じるのは私だけであろうか。“The Strong Are Saying Nothing”は、雪がとけたばかりの早春のニュー・イングランドの種蒔き時の畠の描写で始まる。季節の相違にもかかわらず、類似する重苦しい感じがただよるのは、現実を見る二人の詩人の目に共通点があるからではなかろうか。それは、必ずしも自分の意にそまぬ現実を直視し、その現実を受容するストインズムである。

“No Possum, No Sop, No Taters”というタイトルから冬景色の描写を想像することは困難である。George S. Lessing はその著書の中で鉛筆書きで残されているスティーヴンズのノートの361項目をあげているが、その中に“Possum & Sop & Taters”という項目がある¹³。これが no を付加することによって書きかえられて、現在の題名になったのである。

“possum”、“sop”そして“potatoes”は南部労働者の食事である。この中の“patatoes”を南部方言を用いて“taters”とし、温暖な南の風土に憧れながら、その暖かみを欠く北国の荒涼を歌う形式をとっている。また本来あるべき基本の食事を欠くという喪失感がこのタイトルによって効果的に示されている。タイトルの否定形に呼応するかのようこの詩は第一行目から“*He is not here, the old sun,*”という否定文で始まる。陽が照っていない状態を太陽を擬人化することによって効果的に表現している。“*As absent*

¹³ George S. Lessing, *Wallace Stevens: A Poet's Growth* (Baton Rouge and London: Louisiana State University Press, 1986), p. 175.

as if we were asleep”という比喩はスティーヴンズ独特の perception の問題を含んでおり興味深い。また一人称複数が使用されていることは、少くとも “The Snow Man” よりも読者を詩人に近づける働きをしているように思われる。とにかく冬景色の描写が太陽の不在という事実から始まる。畑は凍り、葉は枯れている。この程度の光では悪運は決定的である。作物が不作であろうという予測は “The Strong Are Saying Nothing” の中の蒔かれた種の運命と重ねて考えられるようである。この寒々とした空気の中で折れた茎は手のない腕をしている。その腕には足のない胴体があり、その点について言えば頭もないのである。頭があるとすればその中に捕われている叫び声は単に舌を動かすのみで声にはならない。雪が地面に落ちる視覚のように、視覚が輝いて消え去るように光る。Joan Richardson は雪を地上におちる “eyesight” というイメージで表現することによって、天上から見下す神の目と人間の perception の二重の意味が示されていることを指摘している。¹⁴ 神の厳しいが慈悲に富む目が注がれなくなり、信仰が失われた時代の荒地を表現するのに印象的な行である。枯葉は地面をこすりながら飛ぶ。1月も末に近い空は堅く凍てつき、茎はかたく土の中に釘づけになっている。雪野に残る枯れた植物の描写に、“arms”, “hands”, “legs”, “heads”, “tongue” と人間の体の部分を指す名詞が用いられていることで、戦争の暴力に翻弄される人間の姿がイメージとなって浮んでくる。この荒涼の中で、不器用に舞う枯葉の中から一つの音節が冬の音の中で最も激しい空虚なる無を歌うのである。極度の荒廃は無なのである。この音をきくものは “The Snow Man” の “a mind of winter” を持つ者であろう。しかし二つの詩の中にある風の音は、“No Possum, No Sop, No Taters” においての方が、その寂寞感はより強いように思われる。そして次の2行、

¹⁴ *The Later Years, op. cit.*, p. 60.

“It is here, in this bad, that we reach/The last purity of the knowledge of good.”がこの詩をしめくくる。悪の極限を見た者こそ善の真の意味を知ることができるのであるという意味にとるのが最も妥当であると思われる。最後の4行のひねりは、孤独感が終らないことを示し、この詩のテーゼに再び読者を引き戻す働きをしていると考えることができる。からすの目にたたえられた悪意は、冬景色に託して暗示される現代の荒廃と悪のヴィジョンである。

Morris はこの詩の風景をダンテの *Inferno* になぞらえて次のように述べている。

... this is the landscape of Dante's *Inferno*: the broken, mutilated stalks which “have arms without hands . . . trunks/Without legs or, for that, without heads” (cp 293–294), the rusty crow with malicious eye rising like a bad angel into the air, the emptiness in which “bad is final” (cp 293), all these images evoke the memory of the ultimate evil and bitter cold at the bottom of hell.¹⁵

このような悪のヴィジョンは、フロストが世界の破滅をテーマに歌った “Fire and Ice” と比較した場合、もっと恐ろしく胸をさされる思いがする。これはフロストの場合世界の状況と人間性の本質とが常に均衡を保って示されており、その詩の dramatic な tone を通してそこにいつも人間フロストがパーソナルに存在しているからではないだろうか。しかしスティーヴンズもこの詩の中では、かすかながら “The Snow Man” では見られなかった救いの微かな光を提供しているように思われる。それは前にも述べた “good” の可能性である。しかしフロストのいわゆる人間味をスティー

¹⁵ Adelaide Kirby Morris, *Wallace Stevens: Imagination and Faith* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1974), p.178.

ヴンズに期待することは無駄であろう。スティーヴンズにとっての救いは、いわゆる善または善の可能性ではなく、“the last purity of the knowledge of good”なのであって、詩人の感情の中にはなく、詩人の理性の中に、詩人の真の perception 或いは imagination の中にあるのである。換言すれば、スティーヴンズにとっての救いは詩そのものなのである。詩が不安の時代における人間に希望を与え、生き方を教えるものであると考える所にフロストとスティーヴンズの最も大きな共通点があるといえよう。

フロストはアマスト大学の若い学生に対して、現代の困難な時代に生きるアメリカの大学生にとって、詩の教育を受けることが、人生を美しく生きるために不可欠であることを説いている。詩による教育とはメタファーによる教育のことである。フロストはあらゆる思考がメタファーの形式をとることを説明し、詩に接する者は、それを書くことによって詩に近づく者も、或いは詩を読むことによって詩に近づく者も、現代に欠けている belief(信仰、信念)という言葉について知ることになろうと説いている。宗教以外の場所で belief について知る機会としてフロストは若者が持つ自己実現のための「自己に対する信念」(self-belief)、他人を信じることによって生まれる二人の人間関係を成就させる「愛の信念」(the belief of love)、そして最後に「文芸の信念」(literary belief)をあげている。そしてフロストはこれらの信念がすべて神への信仰と密接に結びついていることを次のように述べている。

Now I think—I happen to think—that those three beliefs that I speak of, the self-belief, the love-belief, and the art-belief, are all closely related to the God-belief, that the belief in God is a rela-

tionship you enter into with Him to bring about the future.¹⁶

「詩による教育」は社会に対する詩人の役割を学生に対する教育の立場から学生に分りやすく説明したものである。1930年11月に行われた講演であるが、ダーウィン、フロイト、マルクス等の影響がインテリの中に広がっていた時、宗教を真向から論ずることは避けてはいるが、詩においてもすべて人間の究極の行動が神に向けられたものであること、詩は宗教に取って代ることはできないが、メタファーによる“a momentary stay against confusion”、“a clarification of life”¹⁷ の提供によって、この地上に生きる者達に救いを与えるものであることを示したのである。フロストは“The Lesson for Today”(350-55)において、暗黒、混沌の時代に人は如何に生きるべきかを示し、また“Directire”(377-79)において詩による道しるべと救いを示している。¹⁸

スティーヴンズもまた詩とは何か、詩人の社会に対する使命は何かを真剣に問った詩人である。しかし宗教の問題、人は如何に生きるべきか、救いは如何にして得られるかについては二人の詩人の間に違いがある。例えばフロストの“The Lesson for Today”と呼応するかのようになり、スティーヴンズには“How to Live. What to Do”(125-26)という詩がある。スティーヴンズらしくない直截的な題名であるが、内容は題名から想像されるものとは趣きを異にしている。この詩では明らかにアダムとイヴを思わせる二人の人物がエデンの園又は昔の教会に保護されていた土地を後にし、教会らしきものは何もなくてただ高く聳える岩の前で、追放の悲しみで

¹⁶ Hyde Cox and Edward Connery Lathem ed., *Selected Prose of Robert Frost* (New York: Collier Books, 1968), p.45.

¹⁷ *Ibid.*, p. 18.

¹⁸ これら二つの詩については、拙著『ロバート・フロストの世界』(九州大学出版会, 1990)においてかなり詳しい評釈を試みた。

はなく自由の喜びを感じるさまが描かれている。ステューヴンズは教会と宗教を区別し、社会的存在としての教会の意義は認めていたが、神が力をなくし、人々の精神的支え、信念あるいは信仰の対象として神が生き生きと存在していた時代は終わったことを強く認識し、神にとって代る存在を模索し、詩にそれを見いだそうとしたのである。彼は Henry Church に宛てた1940年の手紙の中で詩と神について次のように述べている。

... The major poetic idea in the world is and always has been the idea of God. One of the visible movements of the modern imagination is the movement away from the idea of God. The poetry that created the idea of God will either adapt it to our different intelligence, or create a substitute for it, or make it unnecessary.¹⁹

ステューヴンズによれば、詩の中心思想は今も昔も神の概念であり、詩はそれを生み出してきたのである。もし現代の想像力が神の概念から離れてゆくのであれば、詩はそれに代るものを創りださねばならないのである。彼の全作品はそれを創りだす努力の結晶であると言うこともできよう。彼は初期の“Sunday Morning”(66)において神によって与えられていた秩序、確信、慰めを神に代って与えるものとして、物体の世界の力を歌った。

“Notes toward a Supreme Fiction”(380-408)もまた彼の詩人としての務め、すなわち人生をよりよく理解する助けを提供するものとしての詩の効用を述べたものであるということができよう。“It Must Give Pleasure”(398)は、詩人が想像力の産物を読者と共有することによって

¹⁹ *Letters of Wallace Stevens, op. cit.* To Henry Church, October 15, 1940, p. 378.

提供される地上での幸福を目指したものということができる。“Final Soliloquy of the Interior Paramour”において、スティーヴンズは “We say God and the Imagination are one.../How high that highest candle lights the dark.”と歌い、現代において “God”の代役を務める想像力がいかに高くこの時代の闇を照らすかを述べている。“the central mind”であるこの光から、人間の生活が始まり、そこに孤独から解放されて、imagination と共にあること、これが地上における救いとして十分な救いであるとスティーヴンズは言う。

Within its vital boundary, in the mind.
We say God and the imagination are one...
How high that highest candle lights the dark.

Out of the same light, out of the central mind,
We make a dwelling in the evening air,
In which being there together is enough.(524)

“Desert Places”においてフロストが “they”に対決して、自己の生き方を主張し、また、“Birches”において “Earth’s the right place for love;” (122) と述べて、天を望みつつも地上の生を選んだように、スティーヴンズもまた、天国や神の問題の解決を詩人の役割であるとは見なさず、中世において神が果たした役割を imagination によって担うことを詩人の務めであると考え、その務めを詩を通して果たしたのである。

しかし imagination を神の如く高めることには限界がある。詩論として通用しようとも、生身の人間として生きる詩人自身に詩は最終の救いをもたらさなかったようである。死の数日前にスティーヴンズがカトリックの

洗礼を受けていたことが後になって明らかにされた。受洗を希望してステューヴンズは “I’d better get in the fold now.” と言ったということである。そして翌日洗礼を受けたのち、彼の心は穏やかになり “Now I’m in the fold.” と言ったという。²⁰ Richardson によると、ステューヴンズの娘 Holly Stevens は父が健康時の強い精神力を持って受洗を選んだことを否定しているとのことである。²¹ この事実の曖昧性はステューヴンズの詩の理解鑑賞に直接大きな意味を持つものであると考える必要はないと思う。しかしステューヴンズがペンシルバニアに生れ、厳格なピューリタンの家庭に育ち、教会立の高等学校に学んだという背景が、その後の諸芸術や哲学的思索の影響を凌いで根強くステューヴンズの詩人としての形成に寄与していた事実を思わせられるのである。

以上フロストとステューヴンズを同時代を生きた20世紀を代表する二大詩人であるとして比較考察を試みて来たが、期待以上に類似点があることを発見してむしろ驚きを憶えている。二人の詩人が共に生きた困難な時代は、すでに半世紀前に Matthew Arnold によって、宗教や道徳が混乱し信仰がもはや慰めを持って人間を取りまくことなく、陰鬱な引き潮の響きをもって退いていく時代として彼の “Dover Beach” (1867) において歌われている。

The sea of faith

Was once, too, at the full, and round earth’s shore

Lay like the folds of a bright girdle furl’d;

²⁰ Peter Brazeau, *Parts of a World: Wallace Stevens Remembered*, p. 297 quoted by Joseph Carroll *op. cit.*, p. 343.

²¹ *The Later Years, 1923–1955, op. cit.*, p. 427.

But now I only hear
Its melancholy, long, withdrawing roar,
Retreating to the breath
Of the night-wind down the vast edges drear
And naked shingles of the world.²²

この暗黒の時代においてアーノルドは、“Ah, love, let us be true/To one another!”と信仰の唯一のより所を愛する者においた。フロストもまた“A Prayer in Spring”(12) や “Happiness Makes up in Height for What It Lacks in Length”(333) 等において、少くとも地上の幸福を二人共にある喜びとして歌った。スティーヴンズにおいて、それは *Imagination* という抽象的なものになってはいるが、詩による救いの希求において二人の詩人の共通点を見ることができると思うのである。そして精神性の優位を主張する点において、彼等は共にエマソンから流れでるアメリカ詩の伝統を担う大きな柱であるといえよう。

1992. 1. 28. 受理

²² Lionel Trilling ed., *The Essential Matthew Arnold* (London: Chatto & Windus, The Viking Press, 1949), p. 166.